

不明の「墓石」は日出町出身の儒学者

国東に小川含章の寿碑

国東市国東町の興満アヤコさん(87)が管理している墓のうち、誰を埋葬したのか不明だったものが補修工事をすることで日出町出身の儒学者、小川含章(1812〜94年)の寿碑であると分かった。埋もれかけていた偉人の存在が明らかとなり、興満さんは「素晴らしい先祖の碑を大事に守っていききたい」と喜んでいる。

含章は儒学者として知られる帆足万里の高弟。杵築藩士となり、大分市の勝光寺など県内各地で塾を開いて青少年の教育

子孫の興満さんが管理 「古里の偉人、後世に」

に情熱を注いだ。県史談会協議会の久米忠臣会長(杵築市)は「県内初の教育団体を設立したほか、理論だけでなく実践を重んじる教育方法で多くの弟子を育て、各地に引っ張りだこだったようだ」と話す。

寿碑は亡くなる5年前、含章が当時住んでいた大分市内に建立された

という。日出町歴史資料館の平井義人館長は「長寿を祝って弟子たちが建てたようだ」。その後、管理をする人がいなくなり、含章の長女の嫁ぎ先である国東市の興満家の近くに家族の墓と共に移された。

寿碑は伊予灘を望む国東町鶴川の共同墓地にある。石の破損が進み、彫られた文字はカビやコケ

で読めなかった。「偉い先生の墓だと聞いていたものが古文書が焼失して誰のものか分からなかった。でも、大事にしなればと思った」と興満さん。そこで大分市の墓石店、秀美堂(平尾由美子社長)に補修を依頼。平尾社長は頭石を接着し、欠けた部分をモルタルで埋めるなどしてよみがえ

らせた。寿碑の高さは2尺。平尾社長は「建立当時の墓にしては大きく、墓地の上座に建てられていることが心に留まった」という。そこで、名を彫られていた含章について史実を調べたところ「優れた教育者としてだけでなく、心の優しい素晴らしい人物だと知り驚いた」という。古い墓を解体す



寿碑を見上げる興満アヤコさん(左)と平尾由美子社長(右)＝国東市国東町鶴川

(永富希望)